第一線記者座談会

「強権解散」「むりやり解散」など世論の強い批判を浴びながら、中曽根首相はついに衆参両院同日選挙に踏み切った。大義名文も争点も不明確なまま、「ダブル選挙なら自民党に有利」という、それだけの理由で…。今回の同日選挙の本質はどこにあるのか、選挙結果によってその後の政局はどうなるのか。解散に至る過程を政局の現場で取材してきた第一線記者たちに、その舞台裏や今後の政局の見通しなどを語り合ってもらった。

自民大勝なら改憲も 危険な同日選の行方

――とうとうダブル選挙に突入してしまった。いかに無茶苦茶な解散だったかは、マスコミが報じている通りだが、今回のダブル選挙の本質はどこにあるのだろうか。まず、その辺から話し合ってほしい。

A　詐術の限りを尽くした解散劇だった。結果的には中曽根首相の狙い通りに事は進んだように見えるが、世論の風当たりも含めて、誤算も多かったのではないか。野党はもちろん、自民党内ですら、「これでいいのかな」という空気が強かった。

「死に体」避けた解散

B　「寝たふり」「死んだふり」という言葉が有名になったが、とにかく芝居が過ぎた。五月二十六日午後、解散をめぐる自民党内調整の最後の場面になった五役会で、中曽根首相は席に座るなり「金丸君、ちょっと口が軽いぞ」と言ったそうだ。金丸氏が午前中の五役会議で、「首相はもう、公邸の荷物をまとめて引っ越しの準備をしている。三選どころか、選挙後にすぐ退陣するかもしれない」と発言したことを指しているんだ。つまり首相は、公邸の引っ越し準備の話に信ぴょう性を持たせるために、金丸氏の〝軽口〟をなじったわけだ。これも宮沢総務会長を説得するための芝居のひとつだろう。

C　「寝たふり」というのは、必ずしも正確ではない。衆院定数是正に関する議長調停で周知期間が盛り込まれたとき、首相もいったんは同日選をあきらめたんだ。もちろん、「七月六日同日選挙」の理論的可能性は残されていたが、首相も本当にできるとは思っていなかった。ところが、ちょっと火をつけて見ると、以外に簡単に燃え上がったので、もう一度本気を出した、というのが真相だろう。渡辺通産相あたりが「寝たふりだ」と言っていたのは事実だが、初めは負け惜しみのような感じだったよ。

B　首相は、これから秋までの政局の主導権を確保するために、どうしても解散したかったんだ。解散しなければ、完全に死に体になっていただろう。首相にとって今度のダブル選の本質は、「政局の主導権確保」がすべてだ。

「大勝」に賭ける夢

――しかし、それは「ダブル選挙で勝てば」の話だろう。

B　その通りだ。これだけ無理をして解散したんだから、負ければ責任をとらざるを得ない。その意味ではバクチだ。しかし、首相は勝つと信じている。解散問題でもめているころ、首相は「ダブルをやれば、衆院で二百八十議席はとれる。勝つときに選挙をやるのは、政権党として当たり前ではないか」と、豪語していたそうだ。

A　たしかに、ダブル選挙は大政党に有利だ。「有利な方法で選挙をやろう」という理屈は、けっこう自民党内では通用する。

C　つまり、今度のダブル選挙の本質は、首相にとっては「政局の主導権確保のため」、自民党にとっては「有利だから」ということだな。

――選挙に勝ったら、首相の党総裁三選問題はどうなる。

A　勝てば当然、三選もあり得る。悪くても任期延長だよ。ニューリーダーの中でも安倍外相は、「三人のニューリーダーが足並をそろえれば、三選なんてあり得ない」と強調しているが、非公式にはあちこちで「二百八十議席を超えたら、(三選も) しようがない」と言ってる。勝ったら竹下蔵相か安倍外相のどっちかが「これだけ中曽根政権が支持を得ている以上、党内の規則だけで政権から引きずり下ろすわけにはいかない」なんてことを言い出すよ。抜けがけ競争だな。

暫定政権の「密約」？

――負けたら、政局はどうなる。

B　負け方にもよるが、大敗なら首相はすぐに退陣だ。その場合「暫定政権」論が浮上する。秋までの暫定政権をつくって、その間にニューリーダー間の調整をし、秋に本格的に政権を引き継ぐ、という筋書ができるだろう。

C　ダブル選挙に反対していた「長老連合」の中で、二階堂副総裁が真っ先に金丸氏に説得されて戦線を離脱した。これはいまだに、今度の政局のナゾのひとつとされているのだが、金丸氏は「選挙に負けた場合は、二階堂暫定政権をつくる」と、二階堂氏に約束したのではないか、という説が有力だ。

A　「二階堂暫定政権」なら、宮沢、安倍両氏も乗れる。とくに長老にうけがいい宮沢氏は有利になる。同じ田中派に政権を引き継がせるわけにはいかないから、竹下氏は不利だ。

B　そのせいかどうか知らんが、竹下氏は「暫定政権なら福田元首相だ。経済が難しい時だから、福田さんにやってもらうしかない」と、洩らしている。「福田暫定政権」となると、安倍氏が困ってしまうだろうな。

――今後のダブル選で、ニューリーダーたちの立場はどうなる。

C　竹下氏はダブル賛成、宮沢氏は反対、安倍氏はその中間、という基本的な図式だったから、選挙結果によって、それぞれの立場も違ってくる。最後にダブル選に協力した安倍氏は、いわば「ダブル選実現の功労者」だから、自民党が勝てば、相対的に安倍氏が優位に立つだろう。逆に、負ければ宮沢氏が優位だ。

B　もっとも、三派閥間の数の争いがどうなるか、にもよる。自民党が勝っても、安倍氏が派閥の数を増やせないようでは、竹下氏の方が優位に立つだろう。

――今度のダブル選は、「ニューリーダー選挙」という声もあるが。

A　たしかに、ダブル選突入への経緯を通じ、世代交代は一気に進んだ。とくに、解散反対を主張していた福田氏を説得して、ダブル選容認に踏み切った安倍氏の場合は、一種のクーデターに近いものがあった。これで自民党が勝ち、安倍氏も派閥の数を増やしたら、選挙後は間違いなく「福田派」は「安倍派」に看板を書き替えるだろう。

B　竹下氏も、創政会を独立させて「竹下派」を結成する戦略は失敗したが、ダブル選に勝てば「竹下派」が実現する。

C　宮沢氏も「ダブル反対」を主張し通すことによって、初めて鈴木派内の主導権を確立した。

A　しかし、ニューリーダーたちが、党内の主導権をとるかどうかは、選挙結果次第だ。自民党が負ければ、また長老の出番だよ。

――勝敗の分岐点は。

A　首相は最初、「安定多数」と言いながら、すぐに「過半数」とだな。

――選挙に勝ったら、首相の党総裁三選問題はどうなる。

A　勝てば当然、三選もあり得る。悪くても任期延長だよ。ニューリーダーの中でも安倍外相は、「三人のニューリーダーが足並をそろえれば、三選なんてあり得ない」と強調しているが、非公式にはあちこちで「二百八十議席を超えたら、(三選も) しようがない」と言ってる。勝ったら竹下蔵相か安倍外相のどっちかが「これだけ今度の政局のナゾのひとつとされているのだが、金丸氏は「選挙に負けた場合は、二階堂暫定政権をつくる」と、二階堂氏に約束したのではないか、という説が有力だ。

A　「二階堂暫定政権」なら、宮沢、安倍両氏も乗れる。とくに長老にうけがいい宮沢氏は有利になる。同じ田中派に政権を引き継がせるわけにはいかないから、竹下氏は不利だ。

B　そのせいかどうか知らんが、竹下氏は「暫定政権なら福田元首相だ。経済が難しい時だから、福田さんにやってもらうしかない」と、洩らしている。「福田暫定政権」となると、安倍氏が困ってしまうだろうな。

――今後のダブル選で、ニューリーダーたちの立場はどうなる。

C　竹下氏はダブル賛成、宮沢氏は反対、安倍氏はその中間、という基本的な図式だったから、選挙結果によって、それぞれの立場も違ってくる。最後にダブル選に協力した安倍氏は、いわば「ダブル選実現の功労者」だから、自民党が勝てば、相対的に安倍氏が優位に立つだろう。逆に、負ければ宮沢氏が優位だ。

B　もっとも、三派閥間の数の争いがどうなるか、にもよる。自民党が勝っても、安倍氏が派閥の数を増やせないようでは、竹下氏の方が優位に立つだろう。

――今度のダブル選は、「ニューリーダー選挙」という声もあるが。

A　たしかに、ダブル選突入への経緯を通じ、世代交代は一気に進んだ。とくに、解散反対を主張していた福田氏を説得して、ダブル選容認に踏み切った安倍氏の場合は、一種のクーデターに近いものがあった。これで自民党が勝ち、安倍氏も派閥の数を増やしたら、選挙後は間違いなく「福田派」は「安倍派」に看板を書き替えるだろう。

B　竹下氏も、創政会を独立させて「竹下派」を結成する戦略は失敗したが、ダブル選に勝てば「竹下派」が実現する。

C　宮沢氏も「ダブル反対」を主張し通すことによって、初めて鈴木派内の主導権を確立した。

A　しかし、ニューリーダーたちが、党内の主導権をとるかどうかは、選挙結果次第だ。自民党が負ければ、また長老の出番だよ。

――勝敗の分岐点は。

A　首相は最初、「安定多数」と言いながら、すぐに「過半数」と目標を修正した。ハードルを下げたんだ。しかし、自民党内説得の切り札に「政局の安定」を訴えたんだから、結局はやはり「安定多数」、つまり二百七十一議席が勝敗の目安になる。これを下回ったら、選挙後の首相指名をめぐって、党内抗争になるだろう。二百六十台前半なら、退陣は必至だ。逆に、二百八十ぐらいとれば、三選だな。

半数割れば「抗争」か

――野党にとって、今度の同日選は。

A　「だまされた」という側面と、「しめしめ」という側面があるだろう。「ダブル選は大政党に有利」という定理から見ると、野党にとっては厳しい選挙だ。しかし、憲政史上例のない暴挙をやってのけた中曽根政権が相手なんだから、攻めやすい、という面もある。野党に対する国民の期待もあるのではないか。

B　野党はともかく、自民党を過半数割れに追い込むことだな。新自由クラブも含めてやっと過半数という状況なら、自民党内は抗争が起きる。そのときは野党の出番だ。もっとも、野党の結束が乱れた、自民党との連立を目指した〝抜けがけ競争〟になる恐れはあるけどね。

攻める者が勝つ選挙

――ダブル選挙の情勢はどう見たらいいのか。首相の目算通り、やはり「自民有利」なのか。

C　一般論としては「自民優位」とされている。とくに参院選の方は、自民が楽になった。いったん消えたダブル選が再浮上した最大のきっかけは、参院自民党の危機感だった。定数是正が議長裁定でまとまったとき、野党四党が党首会談を開き、「ダブル選なし」を前提に、参院選の選挙協力を確認した場面があったが、それを見て参院自民党が「これは大変なことになる」と、さわぎ出したんだ。ダブル選が実現したからには、参院選の方は衆院選に乗っかればやっていける。「金もかからなくなった」と喜んでいるよ。とくに、衆院選で自民党は候補者が乱立気味だから、それだけ自民党票を掘り起こす。比例代表区などは、自民が二十二、三人まで取れるのではないか、という見方もあるほどだ。

A　それでも、参院選の方は勝っても負けても、それほど大きな数字にはならないし、政局へのインパクトも少ない。やはり焦点は衆院だ。

B　自民党の「乱立」をどう分析するかだ。一般的には「乱立は共倒れにつながる」として、不安材料になっている。そのため金丸幹事長や首相は、公認候補のしぼり込みにやっきだ。

C　単純に「乱立は不利」とは言い切れない。問題は、選挙戦で「攻めている」のがどっちか、ということだ。自民が勢いに乗って攻めていけば、「乱立」がプラスに作用し、当落線上にいる候補がなだれをうってすべり込む、ということもありうる。そうなれば、自民大勝だ。

A　「自民大勝」があり得るとすれば、ニューリーダー同士による競争が世代交代ムードに乗って自民党に勢いをつけさせる場合だろう。

――野党がそれを食い止めるには。

B　選挙協力も決め手のひとつだ。しかし、衆院の場合、全体としては野党間の選挙協力といっても、数の上では大したことはない。結局、正攻法で今度の同日選の意味を国民にどこまで訴えられるか、ということではないか。それによって、政治の本質とは無縁のところで展開されているニューリーダーの競争などによる相乗効果のようなものを、薄めていくことが大事なのではないか。

C　野党が「中曽根批判」だけに熱中し過ぎると、ニューリーダーに点をかせがせる、ということになりかねない。「中曽根政治」を、自民党政治の一断面としてとらえる視点が大事だ。ニューリーダーたちは「中曽根に戦後政治の総決算をしてもらって、サッパリしてから政権を引き継ぎたい」という気持ちが本音なんだから。

A　その意味では、ニューリーダーは中曽根首相よりタチが悪い。安倍、竹下、宮沢氏とも政権のイメージというものを、さっぱり明確にさせていない、政権欲だけなんだ。

「金」稼ぐことばかり

B　三・角・大・福・中（三木、田中、大平、福田、中曽根）の旧世代のリーダーは、善悪の評価は別として、それぞれの個性がはっきりしていた。一つの政権が「やりすぎ」をやると、次の政権が「引き戻し」をする「フリコの原理」も働いた。ニューリーダーたちには、何の旗印もない。

C　それはニューリーダーの責任というより、新世代の政治家全体の責任だ。今の政治家は「現実」しか見ない。選挙や日常活動に天文学的な資金を必要とする。だから、議員になると金を稼ぐことばかり考える。自民党議員も、派閥から支給される金だけでは全然足りないので、「族議員」としての活動に力を入れる。今や「派閥」より「族」の方が優位になりつつある。だから、派閥のボスの力は相対的に低下してくる。そういう時代に派閥のボスは、旧世代のように「旗印」を掲げて政治を指導する、というタイプにはならないんだ。

「争点」はクッキリ

――ところで、国民にとっては今度のダブル選挙はどんな意味があるのか。あまり明確な争点もないようだが。

A　国民にとってこそ、極めて重要な選挙だと思う。自民党は「争点ボカシ」をしているが、本当は争点がいっぱいある。まさに「戦後政治の総決算」が問われている選挙なんだ。「シラけた」などとは言ってられないよ。

B　自民党は大事な争点をみんなボカしている。「三兆円補正」を言い出し、建設国債増発による公共事業の追加を打ち出したが、臨調行革路線との整合性はあいまいにしたままだ。減税だけ公約して、ウラに隠された増税には口をぬぐっている。国鉄改革問題に至っては、選挙戦の中で分割・民営化をあまり前面に出さず、「新幹線建設促進」ばかり強調している。

C　争点ははっきりしている。自民党にとっての「政局安定」を認めるかどうかだ。政局が「安定」すれば、中曽根首相は戦後政治の総決算を一気に進め、〝大掃除〟をしてニューリーダーにバトンを渡すだろう。つまり、これまで自民党政権にとって手がつけられなかった課題、たとえば大型間接税の導入、国鉄の分割・民営化、教育改革、スパイ防止法……、場合によっては憲法改正の道筋まで、すべての問題が今度のダブル選挙の結果にかかっている、と言えるのではないか。

ストップ、中曽根自民党政治